

あゆみ通信

VOL. 179

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

安心して 人事を尽くす



真城義麿先生

「雑行を棄てて本願に帰す」と聞くと、雑行を全面的に否定すると言うように思われるかもしれませんが、そういうことではありません。明治時代を生きられた清澤満之先生が、若者に向かって他力回向について話をされた中で、その当時福沢諭吉がよく使っていた言葉である「人事を尽くして天命を待つ」という言葉を引き合いに出して、他力回向と言うのは、他人任せから一番遠いことであり、「天命に安んじて人事を尽くす」ということである言われました。

「天命に安んじて」と言うのは、本願力に安心してと言うことです。この私が仏さまから無条件に肯定されている。そして、そこに安心して人事を尽くしていく。私の出来ることを惜しまずやらせていただくと言うことです。早く助けてくださいと言ってお客様のようになっているということではないと言うことです。安心して人事を尽くすことが出来るようになる言うことです。大きな安心感をベースにする。どの人にも存在価値・存在意義があり、そう言う者同士が生きているというところに立ったところで、私たちは一人残らず、限りあるいのちを生きていけるわけです。

ところが私たちはこの近代的な歩みの中で、こう言うことを忘れてしまって、目の前

の雑行(機能と成果)の世界で本当に一生懸命なのです。自分の弱みを見せられない、自分がいい人材だと人に認めてもらわなければ生きていけない。そんな大変な時代を作ってしまったのです。他人に安心できずに、一生懸命にお金をためて一人で生きていく。無縁社会、無縁死と言う世界で苦しんでいる。

そうではないのです。あなたはあなたのままで丸ごと尊いのだという、何も付け加えなくても尊いのだと言われる本願の世界に出遇うと、それまでの歩みがいかに真剣なものであっても、雑行でしか無かったと気付かされて、あらためて出遇うご縁を引き受け精一杯生きていく道が開かれてくるのでしょうか。

(真城義麿〈前大谷中・高等学校校長、四国教区善照寺住職〉)

第1回例会ご案内

2024年第1回の例会を下記の下り行います。会員の皆様のご参加をお待ちします。お誘い併せてお越しく下さい。なお、体調に不安の方はご無理をされませぬように。

記

日時 3月23日(土) 13:30
会場 光照寺(天王寺区上汐)
講題 「濁世を生きる」
講師 上場直裕先生

(大阪教区駐在教導・第5組眞徳寺)
参加費 無料

その他 当日、受付にて2024年年会費を申し受けます。よろしくお願ひします。

紙上法話

和国の教主③

親鸞聖人における聖徳太子観
池田勇諦先生

そういう時代において、この日本の国をどう言う国にしなければいけない

親鸞のことば

信じるからこそ救われる

難信金剛の信樂は、

疑いを除き証を獲しむる真理なり 教行信証

私たちが何かを「信じる」ということは、いかにあてにならないものなのでしょうか。「これだ!」と自分で決めた道ですら、信じて突き進み続けるのは難しいことです。途中にはたくさんの誘惑や自信を打ち碎かれる出来事もあるでしょう。信じたくても信じきれず、念仏を称えたところで、心のどこかで疑いの気持ちが出てくるのが私たちです。

阿弥陀さまは人の思いをはるかに超えた存在です。その光は、私たちの苦しみや悲しみを生きる喜びに転じてくれます。苦しみの中にいる時に見出されてくる光、それが阿弥陀さまなのです。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

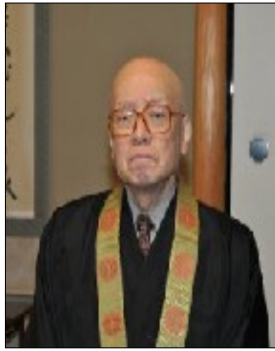
お彼岸に反省すること

80歳を超えて、やっと毎日にお内仏前での朝のお勤めができるようになった。数年前から、血縁のご命日を掲示して、「今日は〇〇さんのご命日だ」と、続けてきた。

最近『歎異抄』を学ぶ中で、第5章「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」を学び、住職からその意味を教えられて、久しぶりにガツンと。父母への追善、思う心を親鸞は、否定されていない。でも残った者の良心や努力で亡き人を何とかしようと言う発想が問題に。

助からねばならないのは私自身なのだと、本願の教えに立つて親鸞聖人は言われていると。血縁だけ、「私の」と言う狭い心を超えていきなさいと。何度も「歎異抄」の聞法をしたが、教えが身に染みていなかったことに気付かされた。

(聞法第一である。(本)



のかと言
うことを
語ってい
る本です。
福沢諭吉
は「一国
の独立は
富国強兵
による」
と言っ
て

います。「富国」と言えば経済です。「強兵」と言えば軍事力です。経済力と軍事力で独立国にしなければならぬ、いかなる国にも隷属するあり方であってはならないと言う厳しい意味合いを含めて「富国強兵」が提言されているのです。

「世界的統一的文化の原造者」一清澤満之

一方で清澤満之は、どのように言われているか。新しい国づくりに向かって動き出して、この大切な時期



清澤満之師

にあって日本が真に果たすべき役割は「世界的統一的文化の原造者」(『教界時言』法蔵館版『清澤満之全集』4巻176頁・岩波版『全集』7巻3頁)の自覚に立って生きることだ。もっと言えば、そういう自覚者を生み出すこと、真の人づくりを清澤満之は提唱したわけです。

この「世界的統一的文化の原造者」とは、清澤先生の言葉なのです。明治29年10月30日付で『教界時言』の創刊号が刊行されていますが、その創刊号の巻頭言にこの言葉が出てくるのです。創刊号の巻頭言ですから、いわば『教界時言』を発刊する意志を述べられている一文にこの言葉が出ているのです。

その巻頭言の趣意は「世界には二大潮流がある。

一つは西洋的文化の流れ、いま一つは東洋的文化の流れであり、西洋的文化と東洋的文化がたまたま明治維新の日本において出遇うことになった。鎖国から開国して西洋文明が流入し、世界の二大潮流が出遇うという千載一遇の好機に我々は出遇わせてもらったのだ」、つまり「日本の果たすべき役割は、世界の二つの文化が真に統一される、そういう文化の創造者になることである」と言うことです。そして、その「世界的統一的文化」の内容として、清澤先生は親鸞聖人の本願念仏の教えを提起されているのです。清澤先生は大谷派宗門に深い恩義を感じられていましたから、親鸞聖人の仏教が本当に果たしてくださる役割、その意義を発揚する責任が大谷派宗門にはあるのではないかと。そしてそれはそのまま、宗門に属している我々一人ひとりの責任であり、使命なのだと強調しておられるのです。

世界の二大潮流の文化を真に統一する真実の創造者。そういう生き方、その自覚に生きると言う一点に現在の我々日本国民の真実の使命と責任があるのだ。そういうところから、こういう言葉が発せられているわけです。

さらに「世界的統一的文化の原造者」が「世界統一国家」(『徒然雑誌』法蔵館版『清澤満之全集』7巻326頁・岩波版『全集』8巻322頁)の原造者と言う言葉で言われます。その「世界統一的国家原造者」が先ほどご紹介した西村見暁先生のご著書のタイトルになっているのです。

お悔やみ申し上げます

宮澤典男さん(83歳・即應寺)



あゆみの会結成以来を共にした宮澤さんが、2/14に急逝されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。通夜と葬儀は、去

る2月18日(日) 午後6時から、葬儀は19日(月) 午後1時から大阪市内の公益社西田辺会館で。あゆみの会、即應寺門徒が参加して行われました。

暁烏敏の聖徳太子讃仰



暁烏 敏師

「国家」と言うことが言われてくるわけですが、私はそこに暁烏先生の「三つの願い」の根源があるのではないかと思

うのです。ですから親鸞聖人が抱いておられた聖徳太子に対する恩徳感最も具体的に極められたのは、暁烏敏先生ではなかったかと思うのです。と申しますのも、「加賀の三羽烏」(暁烏敏1877~1954、高光大船1879~1951、藤原鉄乗1879~1975)と誰言うとも無く言われてきておりますが、その三羽烏の講師のお寺には聖徳太子像が奉安されその讃仰が必ずなされます。その流れを受けておられる嶋崎先生のお寺にも聖徳太子が奉安されています。そこに暁烏先生の教え継承していらっしゃることが何よりも感じられるのであります。

三羽烏の先生方における聖徳太子讃仰とは、「世界統一的国家原造者」として聖徳太子を仰がれたと言うことなのです。だから親鸞聖人が「和国の教主」とまで仰がれたお心を、暁烏先生は清澤先生を通して「世界統一的国家原造者」と聞きあてられたのだと私は思うのです。(つづく)